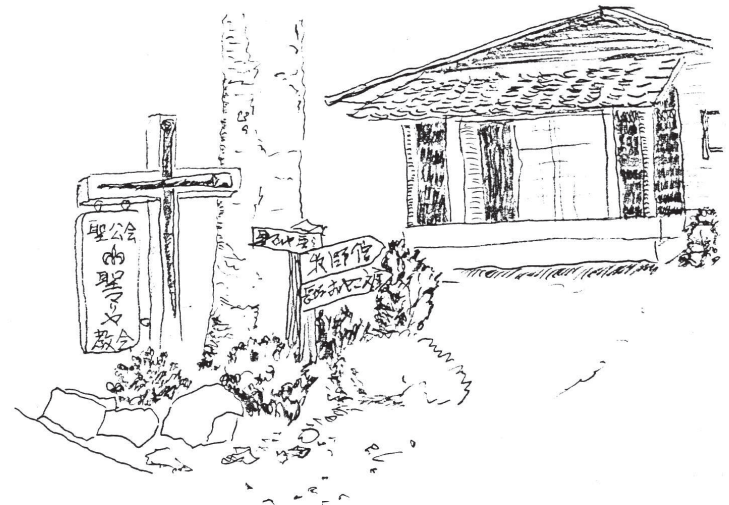




発病の直前元気だった武文ちゃん

たけふみちちゃんと十字架



大斎節も終わりに近く、ここに受難の主日を迎え、この最後の二週間、わたしたちの思いは専ら主の十字架に集中しようとしております。

このときに当り、みなさんと共に、ひとりの少年、自らの苦しみを通してよく主の十字架を理解したひとりの少年の短い生涯のあとを、そのお母さんがつくられた記憶をたどりながら学び、わたしたちの信仰の励ましといたしたいと存じます。

八ヶ岳山麓の清里にゆきますには、新宿から急行にのり、小淵沢で小海線にのりかえるのですが、その一つ手前に長坂という急行のとまらない小さな駅があります。長坂は附近の農村の中心として発達した町で、聖公会では清里聖アンデレ教会の姉妹教会として、昭和三十七年六月ここに長坂聖マリヤ教会が誕生し、植松従爾司祭（現中部教区主教）が最初から主任司祭として定住し、牧会傳道に当ってこられました。植松司祭夫人の喜久江さんは女医で、そこから清里聖ルカ病院に通っておられました。

3

その長坂の町に精巧堂という大きな時計店があつて、前島毅さんはその精巧堂に勤務する一級時計修理士ですが、昭和三十七年二月十二日、奥さんの保子さんとの間に長男が生まれ、その子に武文（たけふみ）という名をつけました。

武文ちゃんは、ごく普通の男の子で、昭和四十三年に町の小学校に入学しましたが、お母さんの記録によると、「内蔵丈夫、風邪にも強い、運動神経普通、頭脳普通、好きな学科は理科、社会、音楽、好きなことは手で工夫して遊びを作る、架空の地図を書く、設計図を書く」とあります。

二年生のとき、友達といっしょに長坂聖マリヤ教会の日曜学校に通うようになりました。休まず、日曜毎に通ったということです。

昭和四十七年、五年生の夏、正確にいいますと八月十九日の朝、起き出すと嘔吐し、頭痛を訴えました。そして毎日それが続き、両親は心配していろいろ専門医にみてもらいましたが、よく原因がわかりませんでした。植松女医さんは脳腫瘍を疑っていたとのことでした。

結局、十月二十六日になって甲府の県立中央病院に入院、検査を受け、手術をすることになりました。そして、十一月二十九日の手術に先立ち、前々日に病室で植松司祭から洗礼をうけ、ダビデの教名がつけられました。

手術の結果、小脳の真中に小児ガンが発見されたそうですが、除去することができず、手当次第で一時的に元気になることはあっても、余命一年位との宣告をうけました。

4

そして、やがて間もなくガンの転移が始まり、十二月二十日には下肢が痛み出しました。十二月二十五日、クリスマスの日は一日苦しかった、子と母と祈り歌う、との記録があります。

十二月二十九日。「イエスさま苦しかったヨネ、ぼくより苦しかったヨ」と泣く、とありますが、武文ちゃんの中では、その苦痛が、自然に主イエスの十字架のおくるしみと結びついていたのでした。

しかし、武文ちゃんのすばらしきは、そうした苦痛の中で、いつも明るかったということ、しばしば病床を訪問していた植松司祭は「実に明るくて、いつもこつちがはげまされてしまつて」といつておられました。

年を越してやや病状が落ち着き、三月十六日に一時退院し帰宅することになりました。「これから教会にゆける」といつてたのしそつだつたということす。

そして、四月二十二日のイースターには、お母さんの保子さんと妹の久美子ちゃんが洗礼をうけ、五月六日に武文ちゃんはお母さんといつしよに岩井横浜教区主教から堅信をいただくことができました。

そんな間にも転移が進んでいたようすで、五月二十八日、両足激痛、泣く、とあります。そんなときはいつも「イエスさま足が痛いからだつこして下さい」と祈つていたそうす。

七月三日。ふとんやいすをたたき、泣き祈る、とあり、「ひとりになつて思い切り泣きたい」「世界中の病人のために祈る」とあります。

武文ちゃんの病室には脳外科のひどい患者が多く、思いやりの深い武文ちゃんは、自分のためだけにではなく、それらの病人のため、いつも代禱しておりましたが、その祈りは広く世界中の病人の上にも及び、代禱の範囲は無限にひろがつてゆきました。

七月十日になんどめかの入院。結局それが、最後の入院となつたのですが、病勢は一段と進んで行きました。しかし武文ちゃんは元氣にがんばりました。

丁度その頃清里で横浜教区のユースキャンプがあり、講師として参加していたわたしは、七月二十九日の主日、長坂聖マリヤ教会を訪問してその礼拝に出席し、その日の説教で、はからずも武文ちゃんのことをきき、深い感動をおぼえました。八月七日の記録に、細貝牧師さんからの手紙、声を出して読む、助けられた、とありますが、当時千葉県の田舎にいたわたしは、武文ちゃんに

げきれいの手紙を書いたのでした。しばらくしてお母さんから心のこもったお返事をいただいたことを記憶しております。

十月四日。夕方笑顔出る。母の顔のホクロを指して「十字架の型にあるね。まがっているけど」といい、「みんな生きている限り悪魔と斗わねばならないネ」、「お医者さんと病人は病気の悪魔と斗うんだ」、「イエスキスマのいる天国は悪魔がいらないだろうね」と言う、とあります。武文ちゃんは本当によくがんばって病気の悪魔と斗ったのでした。敢斗悔いなしです。

十月二十日。「イエスキスマはごはんを食べてごちそうさまいつているかな」、「イエスキスマの胸の傷治ったかな」といったとありますが、これは数ある武文ちゃんの残した名言の中でも最高のものといわれています。

十一月十八日。「もっと広いところへ行きたい、ここから出たい」とあるのはスキスマのお召しに対する答えのようにも思われます。

そして、その年のクリスマスの夜、わたしは植松司祭から電話をいただきました。その日の午前二時三十分、武文ちゃんがお両親と植松司祭に見守られながら召されたというお知らせでした。

「そうでしたか。クリスマスの日だね」とわたし。「そうなんです。武文やった、という感じですよ」と植松司祭。

葬儀は十二月二十七日午後二時、長坂聖マリヤ教会で行われるとのこと、わたしはどうしても行かずにはられない気持ちになり、病人の聖餐のやりくりをつけてその朝長坂に向いました。

いすのない聖堂にいったいの会衆でした。武文ちゃんの愛誦した聖歌「主にしたがいゆくは」「主われをあいす」「よろこべや たたえよや」等がうたわれました。その「よろこべや」はなかに武文ちゃんの教名ダビデがでてくるので特別親近感をもっていて、よく病室で歌っていたということです。

涙は自然に流れても、決して悲しくない、本当に明るい空気のいつぱいな不思議な葬儀でした。

一年四ヶ月に亘るお母さんの記録は次の言葉で結ばれていました。「悪魔と斗って肉体はぼろぼろになったが、精神は神様によろこばれる子どもだったと思います。どうぞダビデ武文をイエスキスマだっこして下さい。武文を通してすべての事に感謝です」と。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」（ヨハネ十二の二十四）とのみ言葉通り、お父さんの毅さんも次の年のクリスマスに洗礼をうけました。そして現在教会委員や教区会代議員をしており、お母さんの保子さんは日曜学校の先生で、家族中が熱心に教会生活にはげんでおります。伯母さんのひとりも洗礼をうけました。

なくなった年のお誕生日二月十二日に、「大人になったらお父さんとお母さんをうんと大事にする」とくりかえしいつていたという武文ちゃんでしたが、お母さんはそれに答えるように「武文がうんとうんと親孝行するからねと言いましたね。お父さんお母さん、くみちゃんをイエスさまに紹介して、体で親孝行出来なくても、心で、いえ自分の体をなげだしてなでして呉れましたね」と。

入院中から武文ちゃんのことをつたえきいて大勢の人びとがはげまされていました。わたしももちろん武文ちゃんのファンで、大ファンで、ひとりでも多くの方々に武文ちゃんのことを知っていただきたいと思っています。

主イエスは「だれでもわたしについていきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」（マタイ十六の二十四）とおっしゃいました。わたしたちは武文ちゃん

にはげまされて、めいめいに与えられた十字架を背負い、どこまでも主イエスに従って行こうではありませんか。

あとがき

武文ちゃんのことについては、当時何度か説教したり、横浜教区報に書いたりしましたが、もう少しまとまったかたちで記録しておきたいという気持ちを持ち続けてきました。

そして、今回お母さんのつくられた病床日誌を拝借することが出来たのを機会に、それをもとにして自分の教会でもういちど説教し、この四月五日には東京の三光教会で行った大齋講話でも話しました。これはその時の原稿に少し手を加えたものです。

印刷できたのは、仙台にいる畏友河上房義君が、昨年五月二十七日に九十才の高令で安息し信仰の生涯を全うされた母堂河上光子さんの記念にといつて送って下さったお金のおかげです。

その河上光子さんもお若い頃幼いお子さんをなくされ、入信されたのです。

(一九八二年復活節 細貝 岩夫)

日本聖公会横浜教区 長坂聖マリヤ教会

1981年4月第一刷発行
1982年1月第二刷発行
2009年12月再版発行
2012年4月デジタル版発行